「だ」が使われるとき

三枝令子

要旨

名詞述語の「だ」は、文内の様々な位置で用いられるが、話し言葉の文末ではモダリティ性を持つために、その使い方に条件がある。すなわち、それが他者に向けた発話か、自分自身に向けた独話であるかによって、男性と女性で使い分けがある。一般に、女性は「だ」の持つ強い感情表現性のために、他者に向けた発話では「だ」で言い切ることをせず、「だ」を省いたり、「だ」に終助詞を付加するなどして、語気を弱める方策を採る。本稿では、文における「だ」の使われ方を観察し、特に、話し言葉の文末における「だ」の用法の分析を試みた。

キーワード　だ、「だ」のモダリティ、終助詞

1. はじめに

これまで「だ」は名詞述語として働く、とされてきた。渡辺実（1971）の構文論においては、文を構成するものとして統叙、再展叙、陳述がある。すなわち、「統叙の働きによって備わった叙述内容を素材として、再展叙がはたらかず陳述が働いたときに、はじめて文は成立する。」（92 頁）のである。そして、助動詞の「だ」は、「統叙をしか分担しない」（125 頁）。しかし、この「だ」の名詞述語を作る働きに加えて、「だ」にモダリティ性を認めようとする立場がある。ここで言うモダリティとは、仁田(1989)の、文を言表事態と言表態度に分けたときの、言表態度を形成するもの、また、益岡・田窪（1992）の「事態や相手に対する話し手の判断・態度を表す文法形式」(117 頁)であるムードに相当する。仁田のモダリティは、さらに「言表事態目当てのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」とに分けられるが、近年の指摘は、「だ」に「発話・伝達のモダリティ」までも認めようとするものである。その立場には、結局次の二つがあるように思われる。一つは、文末の「だ」にモダリティ要素も認めるもので、メイナードに代表される。メイナード（2000）は、「だ」を「情報の『だ』」と「情意の『だ』」に分け、前者は命題の一部だが、後者の「情意の『だ』」は、命題の構成要素ではないとする。次のメイナードの例で、 a が情報の『だ』、b が情意の『だ』にあたる。

(1) a　彼は学生だ。

　　b　私に追いつくと、佐藤くんは、フウっと大きく息をした。
　　「あんた、いつもノロマ」なのに、こういう時だけ速いんだ・・・・」
　　いきなりこれだもの・・・・。どーせ、ノロマですよぉ・・・・だ。

もう一つの立場は、従来の名詞述語用法にかわって、文末の「だ」はモダリティ要素しか持たないと考えるものである。荘司（1992）鈴木（1993）は、正面から「だ」の問題を

扱ったものではなく、荘司（1992）は、疑問文と「か」の関係をみる上で、また、鈴木（1993）は「女性語」の特徴を考えるにあたって、「だ」にモダリティ的要素があることを指摘している。荘司は、次のような事実に注目した。

(2) 来週の委員会には主席する？　＊このお菓子は甘いだ？
　　来週の委員会には出席します？　＊このお菓子は甘いです？

「ます」は丁寧さを担う要素と考えられるが、上の例で「だ」「です」はほかの機能も併せ持ち、そのために疑問化しにくいと考える。また、「だ」は、文末において男性は使っても、女性は使わないことが多いことから、「丁寧体」の「です」に対応する普通体は、「だ」ではなく、「だ」を削除した形と考える。荘司（1992）自体は、「だ」の分析を目的とする論文ではないが、その（注）において「『だ』という形式は英語の be 動詞にあたるようなコピュラと理解するよりも、むしろ意味的機能は断定、判断を担うモダリティで、統語的機能としては後続する言語形式（過去や完了の時制辞、伝達のモダリティ形式など）を導くためのものにすぎないのではないか」「現在形の言い切りで終わる『だ』はオプショナルなものではないか」と述べている。メイナードが「だ」のことがら的側面まで否定するものではないのに対して、後者の立場は、「だ」をモダリティを担う要素と考えていることになる。

メイナード、荘司、鈴木らが指摘するように、「だ」がいわゆるモダリティの要素を持つことは否定できない。しかし、また、文内において省略できない必須要素の「だ」も存在する。本稿では、文末に限らず、文の中で「だ」が構文的に必要なのはどういうときなのか、そして、それぞれの「だ」がどういう役割を担っているのかを考えてみたい。「だ」の扱いにおいて、話し言葉と書き言葉とでは異なるところが大きいので、基本的に話し言葉を中心に考え、後半、書き言葉についても若干ふれる。「だ」が構文的に必要な時を考えるにあたっては、文頭、文中、文末とに分けてみていくことにする。その前に、「だ」の活用と働きについて本稿の立場を次に示す。

2．「だ」の活用と働き

「だ」の活用は、次のように考える。

	現在	過去
言い切り形	だ	だった
連体形	な／の	だった
連用形	に／で	だったり
推量形	だろう	だったろう
条件形	なら／ならば	だったら

ただ、本稿では、「だ」の活用形すべてを考察の対象とするのではなく、この活用形の一つ、言い切り形「だ」の表れを観察する。

「 X は Y だ。」という名詞述語文において、「 Y だ。」という述部は、形容詞的でことがらの性質や状態を表す。名詞述語文は「 X は Y。」でも意味は通じるので、それに「だ」が付加されることで、ことさらに「確認」の意味合いが加わる。「 X は Y だ。」という名詞述語文が、動詞、形容詞文と異なるところは、この「確認」の意味が形になっている点と言える。

3．「だ」のモダリティ性

名詞述語の「だ」が構文的にどういう場合に義務的で、いつ義務的でないのか、それを考えるに当たっては次の二つの点がポイントと思われる。

① 「だ」を省略してもその表現が成り立つか。
② その「だ」が「です」に置き換えられるか。

①②とも「だ」が素材的要素を持つか、陳述の働きを持つかを問題にしている。「だ」を省略しても表現がなりたつということは、その「だ」は素材的要素ではないということであり、さらに、「です」へ置き換えられるということは、「だ」が素材的要素だけを担っているのではなく、モダリティ性を持っていることになる。この条件を、文頭、文中、文末に現れる「だ」について順にみていくことにする。大ざっぱに言って、「だ」が省略可能なものは文末に現れ、文頭と文中では「だ」は省略できないことが多い。一方、「です」への置き換えについては、その表現が対者的なものか独話的なものかが関係している。

3．1　文頭（例文頭の F は、女性の発話、M は男性の発話であることを示す）

「だ」が文頭に現れるのは、接続助詞として前文を受ける場合だが、それはたとえば次のような例である。

(3) M「いいんだよ。コーヒーをくれ」F「はい。だけど、あなた会社が倒産したっていうのに、そんな呑気なことを言って・・・」（女社長）
(4)「ごめんよ。だって、あんまりびっくりしたから・・・」（女社長）
(5) 財布を忘れた、だもんで彼に借りたんだ。

文頭に現れる「だ」を含む接続詞は、次の二つに分けられる。

a だから、だけど、だったら

b だとすれば、だとしたら、だとすると、だもんで、だって

a 類は、「だ」の省略ができない、もしくは、しにくい。「だが」も a 類に含まれるものだが、日常の話し言葉ではほとんど使われない。「だけど」の「だ」は省かれることがあるが、その場合は、文の接続ではなく、節の接続関係ということになろう。接続詞は、先行する表現を受けて後ろへ続けるものだから、代名詞や前文の述語相当の語を一般に必要とする。a の類は、接続詞として成熟しており「だ」の省略はできないが、ただ「です」への言い換えは可能である。「だったら」は「でしたら」となる。一方、 b は、「と」で受けるものは「だ」の省略が可能だが、「です」への言い換えはすべてできない。 a が、「です」への言い換えが可能なのは、終止形を受ける接続助詞を構成要素としているからで、b が「です」への言い換えができないのは、「と」や名詞が言い切り形を受けるためである。「だ」の省略可否については、「だって」は、縮約形として一語化しているため「だ」を省略することはできないと考えられる。結局、「です」への言い換えは、「だ」が終止形で陳述度が高い場合は可能で、言い切り形で概念化しているものは言い換えられないことになる。「と」の前の「だ」が省略できるのは、引用の「と」に見られる共通の性質である。ただ、「だ」が省略できる「だとすれば」「だとしたら」「だとすると」については、「だ」のあるなしによってわずかながらニュアンスの違いがあるようだ。

(6) a「郵便局が民営化されるようだ。」「だとすると、失業者がまた出るのかな。」
b「彼は就職２年目だそうだ。」「とすると今 24 か。」

「だ」のある方が、前文を受けていることが明示されている点で、前文、後文ともに同じ重みがある。b のように「だ」がないと、全体で一文のようであり、後文に重きが置かれるような感じがする。

３．２　文中

文中で、「だ」が現れる場合は、四つに分けることができる。順に見ていく。

３．２．１　名詞類を受け、後ろに助詞が続くもの

(7) 変なことじゃないのかねえ、人殺しだのひもだのって・・・」（女社長）
(8) ・・・嘘をついたときでも、ハッキリそう白状してくれればいいの。それをあなたは最後まで、嘘だか本当だか、騙すのか騙さないのか、ハッキリしてくれないでしょう。（夢見る女）

「だの」「だか」は、次の例のように、名詞だけでなく動詞・形容詞も受けることができる。その点で、並列の助詞として一語化していると考えられる。

(9)行くだの行かないだの、意見が割れた。
(10)行くだか行かないだか、はっきりしない。

ただ、「～だか～だか」と「～か～か」、「いつだか」類と「いつか」類は例示性のあるなしという点で意味が異なるので、この「だ」には述語性は残っている。しかし、「の」に連体修飾のように接続する点で概念性が強い。
「だって」の「だ」も、「です」に置き換えることができず、その点でこれも一語化していると言える。

(11) あなただって雨に濡れた。
(12) 私だって写せる。

しかし、(11)の「だって」は「も」にしか置き換わらず、(12)の「だって」が「でも」にも置き換わる点で、同じ「だって」にも述語性の違いがある。「だって」はもともと「だとて」を元の形とする点で、助詞化せず、次の引用に近いものもあるということになる。

3.2.2 引用句

(13) F1「一体何だって言うの？」 F2「うちからおさめたスポンジが不良品だと言うんです」（女社長）
(14)社長がストライキの首謀者だなんてきいたことない。（女社長）
(15)本当に一瞬見ただけだから、それをどうして尾島だと思ったのかもよく分からないの。（女社長）

ここに含まれるものとして、ほかに「だとする」「だとか」「だとの」などがある。しかし、これらの「だ」は、引用句の中にあることで述語性はあるが、概念化している。野田（1989）の用語では、「虚性モダリティ」(133 頁)に当たる。このため、一語化した「だって」を除けば、「だ」の省略が可能だと考えられる。モダリティ性はないので、「です」には置き換わらない。「か」との結びつきについては、一般に「スミスさんがカナダ人｛＊だ／φ｝か知らない。」と、「だ」は疑問節を作る「か」の前には来ない。これは、「だ」の断定性と「か」の不定性とが相容れないためと考えられる。しかし、疑問詞がある場合は、疑問性が明らかなため、「スミスさんがどこの国の人だか知らない。」と「だか」の結びつきが可能となる。この「だ」と「か」の結びつきのルールは、引用句に限らず、文

末においても常に成り立つ。「だそうだ」も引用の働きを持つので、終止形を受ける。その点でここに含まれるものだろうが、様態の「そうだ」との使い分けから「だ」の省略はできない。

３．２．３　接続助詞が続くもの

(16) F「でも、伸子さんのご親戚だし・・・」（女社長）

(17) F「上に立つ者があまり仕事熱心だと、部下はやりにくいわ。」と純子がこぼした。

(18) M「そうだな。――まず三千万、と言いたいところだが、一千万にまけといてやる。大サービスだぜ」

(19) F「だって、あなたのような美人ならいいんだけど、私なんてこの顔でこのスタイルよ。」（女社長）

ここに含まれるものとしては、「だし」「だと（条件）」「だが」「だから」などがある。女性は「だが」が使いにくく「だけど」を用いることが多い。この「だ」は終止形で、陳述度が高い。「だ」の省略はできず、さらに、丁寧表現の「です」に置き換えられる。

本来連体形を受ける「もので」「のに」が、「子供だもんで」「雨だのに」と「だ」を受けることもある。この「だ」は、いわゆる終止形ではあるが、引用の場合と同じく、概念化したものというべきだろう。

３．２．４　間投助詞

(21) M「ところがだ、あの時彼女の死体は、そのままの形で、上半身まで死後硬直しはじめていたのだよ。」（金田一）

(22) M「それにだ、今、倒産させてしまえば、夏のボーナスを支払わなくて済む。」（女社長）

「だ」によって句であることを際だたせている。女性は、この形では使いにくく、終助詞を用いることが多い。省略可能で、かつ、「です」にも置き換えが可能で、モダリティ性が高い。

３．３　文末

文末での「だ」の現れ方は、そもそも名詞の後ろに「だ」が現れるか否か、また、現れる場合、どのような結びつきの形で現れるかによって、大きく次の五つに分けられる。

（１）何もつかない場合	例　これは辞書。
（２）「だ」のみの場合	これは辞書だ。
（３）「だ」に終助詞が付加する場合	これは辞書だね。

（4）名詞相当句に「だ」が付加せず、終助詞だけの場合　　これは辞書｛さ／よ｝。
（5）その他：「だ」を含む助動詞　　これは辞書なんだ。

以下、それぞれの場合について順に見ていく。

3.3.1　何もつかない場合

「だ」は、名詞述語の働きを持つものだが、動詞・形容詞の場合とは異なり、述語の「だ」がなくても表現が理解されることも多い。「これ、辞書」だけでも十分理解可能な場合もあるし、日本語では「X は Y」と、「は」を用いることで、 X と Y が関係づけられる。その意味で、文末の「だ」は必須要素ではない。すなわち、「統叙」に必須の要素とは言えない。「去年の運動会は雨だった。」と過去の場合にはじめて述語を必要とする。このように考えると、文末の「だ」は多かれ少なかれモダリティ性を持ち、ムードに関わると言うことになる。[1]

3.3.2「だ」のみの場合

では、「だ」が文末にあるとき、どのようなモダリティ性を持つのだろうか。それを考えるときに次の二点が問題になる。

①「です」への言い換えが可能か。
②　男女共通に使えるか。

②の男女共通に使えるか、という判断基準は、一見曖昧なようにも思われる。女性でも男性と同じような物言いをすることは可能である。しかし、その場合は、きつい物言いをすることで、ある効果を意図しているわけで、女性が普通に使う表現とは区別されるものと考える。

「だ」で言い終わる場合、男女が共通に用いる「だ」と、男性だけが使う「だ」の二通りある。それぞれの用例には様々なものがあり、重なり合うものも多い。分類はむずかしいが、以下のような使い方があげられる。例文の前の M は男性の発話、F は女性の発話であることを示す。

3.3.2.1　男女共通に用いる「だ」

男女共通に用いる「だ」は、いずれも「です」に置き換えられない。これは、他者目当てでない、自分に向けた発話のためである。

1 三枝(2000)では、文末の「だ」の基本的な働きを統叙においていた。その点で本稿は三枝(2000)を修正する。

①感情の吐露

(22) M「もう、だめだ・・・」（ひき逃げ）

(23) F伸子は天を仰いで、「もうだめだ」と呟いた。（女社長）

(24) F「あっ、男子が騎馬戦の練習してる」F「ほんとだ」（ちびまるこ）

(25) M「物好きな奴ばっかりだ！」と、呟いた。（オペラ）

(22)(23)と、同じ発話が男性にも女性にも使われている。

②不満・非難

(26)M「ざまあみろ、だ」

(27)F「へん、だ」（オペラ）

他者への非難を確認的に述べた表現と言える。「だ」の前に間があることで、その前の非難表現が客体化される。

③発見

(28)F「あ、お茶屋さんだ！」（朝日）

(29)M「おっ、旅籠だ。今日はここに泊まろう」（朝日）

(30)M「何だよ　見せろよ。」M「ゲッ、トカゲだ！」（ひき逃げ）

(31)M「あった！これだ！」（金田一）

具象名詞に続く。眼前にある物を、想定していたものと一致すると認める。

④思い当たり

(32)「そうか、『絵』だ・・・」そうつぶやいて、ハジメは、椅子から跳ね上がった。（金田一）

(33) F「あ、そうだ、ねえ、研究室行った？」（しこ）

現在の思考内容と記憶にあるものとが一致したときの表現。以上の４種類の「だ」の用法の中で、この「思い当たり」の用法だけが「だ」を省略しにくい。

３．３．２．２　男性だけが使う「だ」

以上が男女共通に用いる「だ」の用法だが、以下の「だ」は、男性だけが用いる表現である。いずれも他者目当ての発話である。

①主張、強調

(34) F「私、中年の人って好みなの。ねえ、栗山さん」M「栗原だ」（オペラ）

(35) F「お父さん、そんな身内の恥を」M「いやええんだ。これが供養だ」（ひき逃げ）

(36) F「捜してあげるわ。どんな人？」M「若い女性だ」（オペラ）

(37) M「うそだ！」尾島がまたどなった。（女社長）

②宣言

(38) M「これは神聖なコンクールだ！」（オペラ）

(39) M「俺は明日からアメリカだ。二週間戻らん」（女社長）

①と②、次の③は、連続的である。

③命令

(40) M「礼だ、礼をしろ」（しこ）

(41) M「そのほかの者は、競技とおどりの練習だっ」（ちびまるこ）

「だ」に命令の意味合いが出てくるのは、「だ」の前の名詞に動作に転換できる意味が含まれている場合である。もとよりこの意味合いは、文脈によって生まれるので、上のように「する」を取る動詞でなくても、「車だ！」のように命令の意味を持ち得る。

④疑問

(42) M「年はいくつだ・・・３８歳です」（蛇蝎）

(43) M「どういうことだ」あずさ、答えず・・・（ひき逃げ）

疑問詞が必要である。

⑤問い返し

(44) M「都合のいいこと言うんじゃねえよ！陸の王者だから陸王だあ？絶対慶応入れだあ？」（ひき逃げ）

この発話は、かつて発話者の親が「おまえは陸の王者だから、おまえの名前は陸王だ。」と言ったのを受けて、その相手の立場に立って、発話を繰り返しているものと言える。

３．３．３「だ」と終助詞

ここでは、次の二つの用法をまとめて見ることにする。

（３）「だ」に終助詞が付加する場合
（４）名詞相当句に「だ」が付加せず、終助詞だけの場合

「だ」に終助詞が付加する場合としない場合とがあるのは、終助詞自体の性質による。次は、文末の「だ」に付加する語と付加しない語を分けたものだが、必ずしも終助詞に分類されないものも含めた。

前に「だ」が来ないもの　：「さ」「じゃん」「か」「の」
前に「だ」が必ず来るもの：「ぜ」「ぞ」「な」「わ」「っけ」「って」「とも」「こと」「もん」「い」（疑問詞疑問文の場合）
前に「だ」がある場合とない場合があり得るもの：「よ」「ね」

「だ」と終助詞の関係について、次のようなことが言える。
１）終助詞の「ぜ、ぞ」はもっぱら男性、「わ」は女性が用いる。「だな」については男性・女性とも表現が成り立つが、男性が他者に対しても使えるのに対して、女性は独話で使うのが普通だ。

(45) M「小説家の松本清一だな、死んでもらうぜ」（鎌倉）
(46) F「雨だな。」

２）前に「だ」が来ない終助詞として「さ」があるが、これは「だ」と「さ」の働きに重なり合うとことがあると考えざるを得ない。逆に、「だ」が終助詞として働いていることを示しているとも言える。「じゃん」は「ではない」が変化したものと考えられるから述語性は明らかである。「の」は、名詞性を残しているために「なの」という形でしか接続しない。しかし、「彼は出張中ですの」「あれはうそですの」という表現が女性には使われる。これは、「ので」の接続においても見られる「出張中ですので休みます」と同じく、丁寧さを求めたための用法と思われる。

3）「だ」がある場合とない場合とがあり得る終助詞の場合は、次に見るように「だ」のある方が男性的な表現で、女性は「だ」を省く方が自然な表現になる。

男性的：上手だね。　上手だよ。　あしたは雨だよね。
女性的：上手ね。　上手よ。　あしたは雨よね。

先に、間投助詞のところでふれたが、男性が「これはだ、・・・」と「だ」だけの表現が可能なのに対して、女性は一般に「だ」を使わず、終助詞のみを用いる。
男性：　これはだ、　これはだ｛な／ね｝、これは｛な／ね／よ／さ｝

女性：＊これはだ、＊これはだ｛な／ね｝、これは｛ね／さ｝

3.3.4　その他

その他、文末に「だ」が現れる形式としては、形式名詞に「だ」が接続して助動詞化したものがある。この中で「のだ」は、ほかの形式名詞より意味の抽象度が高い分、使用範囲が広い。まず、それから見ていくことにする。

3.3.4.1「の（ん）だ」

「のだ」の基本的な働きは、叙述を「の」によって名詞化し、それをもう一度叙述化することだと言える。吉田(1988)は、様々な「のだ」の用法を精密に分類している。それを先の「だ」の用法と並べて以下に示す。ただし、吉田の分類で特殊なものとされた「整調」「客体化」は除く。

他者目当て		独話	
「だ」	「のだ」	「だ」	「のだ」
疑問 問い返し 主張・強調 宣言 命令	教示／強調 決意 命令 告白	感情の吐露 不満・非難 発見 思い当たり	発見 再認識 確認

まず、他者目当ての用法から見ていく。吉田の分類には「疑問」「問い返し」に当たるものがない。この理由は不明だが、形が平叙文でも、語調によって命令の意味合いを持つ用法を「命令」と名付けるなら、「疑問」「問い返し」も「のだ」の用法の一つと考えられる。実際、次のように「疑問」「問い返し」に当たる用法は「のだ」にもある。

(47)　いつ来たんだ？
(48)＊田中さんが来たんだ？
(49)（相手の発言に驚いて）私、結婚するんだ？

ここでも「だ」と同様、「のだ」と「か」は結びつかない。他者目当ての「告白」は、「止めないでくれ、わたしだって辛いのだ」（吉田）というものだが、こうした事情説明の要素が入る使い方は「だ」ではできない。一方、独話の場合をみてみると、直接的な感情表現である「感情の吐露」「不満・非難」は、「の」によって客観化している「のだ」では表現できない。逆に、「へー、じゃあキミはひとりっこなんだ」（吉田）という「確認」の「のだ」は、「だ」では表現できない。ここに「だ」と「のだ」の違いが端的に現れて

いると言えよう。本稿では２節で述べたように、基本的に「だ」に「確認」の意味があると考える。吉田の「のだ」の用法分類にも同じ「確認」の用語があって紛らわしいが、吉田が「のだ」の中の「確認」とする用法は、「だ」と対比したときにはむしろ「再認」と呼ぶにふさわしいと思われる。たとえば、朝飛び起きて時間に遅れたのに気付いたときの発話は、まず「寝坊だ」であろう。そのあとで我に返って「寝坊したんだ」という発話が出てくると考えられる。「だ」は「確認」、「のだ」は「再認」という違いはあるが、しかし、「のだ」も「だ」も他者目当てか独話かによって使い方がはっきり分けられる点が興味深い。独話の「だ」と「のだ」が共通する点は、丁寧表現の「です」に置き換わらない点だ。

(50) 独話：（はっと飛び起きて我に返り）　a　「寝坊したんだ」
　　a'＊「寝坊したんです」
　　対者的：「どうしてこなかったの」　b　「寝坊したんだ」
　　b'　「寝坊したんです」

しかし、対者的な用法では、女性は「だ」を用いないが、「のだ」は、女性も言い切り形を用いる。これも「のだ」が持つ客観性のためと考えられる。

(51) a（宣言）　M/＊F 明日から出張だ。
　　b（決意）　M/F　明日から出張するんだ。

３．３．４．２「形式名詞＋だ」

「のだ」以外に「形式名詞＋だ」の例として次のようなものがある。

はずだ、つもりだ、せいだ、おかげだ、わけだ、からだ、ためだ、ところだ、ものだ、べきだ、そうだ、ようだ、みたいだ

基本的には「のだ」の場合と同様、これらの形式名詞表現が、他者目当てに使われる場合、男性はそのまま用いることも可能である。女性が用いる場合には「だ」を省くか、「だ」を省いて終助詞をつけるか、もしくは「だ」にさらに終助詞をつけることが多い。

４．書き言葉

書き言葉では、話し言葉と違って、名詞述語を省略することはしない。それにはいくつか理由が考えられる。何より大きい理由は、書き言葉では言語外の文脈の助けがないため、省略がさけられることがあげられる。また、「だ」を省略すると、「だ」がなくて文とし

て認められるものになるという問題がある。述語がない「X は Y」文は、話し言葉では言語外文脈からその述べ立てる内容の時制等が定まる。しかし、書き言葉では、堀井（1974）にあるように「動詞の法や時制の制限を受けることがなく、話し手の主観性を離れた言表」(46 頁)となる。そして、「春は曙」「読経は夕暮れ」タイプの、「一般的性格の断言に用いられ、格言風の文体に使用される」(47 頁)ことになる。

書き言葉では「です・ます体」と「だ・である」体という文体の使い分けが問題になるが、「だ」と「である」という語形の使い分けにもむずかしいものがある。「である」は、話し言葉では演説のような一方的な話の時にしか用いられないが、書き言葉ではよく用いられる。「である」の「だ」にない特徴は次の点である。

①「まい」へ接続する　：「ではあるまい」
②活用する　：「であれ。」
③係り助詞を間に入れる：「ではある」
④名詞を修飾する　：「であるとき」

「だ」と「である」の使い分けは、書き言葉のジャンルによるところが大きい。書き言葉をジャンルによって大きく次のように分けると、上から下に行くにつれて「だ」の使用が多くなる。

1　専門書・論文
2　一般教養書・新聞
3　小説・随筆

すなわち、論文等の客観性が求められる文では「である」がよく用いられ、逆に、小説のような主観的な文では「だ」が多く用いられる。もちろん、これは、ジャンルごとに固定的なものではない。また、一文中でも混ぜて使われることがある。次の例は、ジャンルで言えば、2 の一般教養書に当たる。

(52) こんなことをここに書いたのは、六法全書を使う法律家は、「誤植だから出版社の責任だ。」と言って涼しい顔をしてもいられない性質のものだということをしめしておきたいからである。それは実際には、無理な場合も多々あるはずだと思うし、私自身にも誤植にひっかからない自信などないのだが、形式上はまさに法律家が責任を負わなければならないものであることを若い読者にも伝えようと思って言及したのである。（法）

新聞も「だ」「である」が混ざり、さらに、体言止めが用いられる。これは、スペースの節約のためもあるだろうし、また、単調さをやぶって生き生きした感じを与えるという

効果もあるだろう。小説においては、「である」よりも「だ」の方が多く用いられる。しかし、その定量的な分析は、もはや本稿の枠を越える。

5　まとめ

以上、話し言葉、書き言葉における「だ」の使い方をみてきた。以下にまとめると、次のようなことになる。

まず、「だ」が名詞述語としての述語性を持っているのは、「文頭の接続詞の一部」と「文中の名詞類を受け後ろに助詞が続く場合」である。ただ、これらの「だ」は、述語性を残してはいるものの、「です」には置き換わらず、一語化している。「文頭の先の残りの接続詞」と「引用句」では、「と」の持つ概念化の働きによって「だ」が概念化するので、「です」には置き換わらない。また、「引用句」の場合は、言い切りの場合にもそうであるように、そもそもこの述語の「だ」はなくてもいいものなので、省くことができる。ただ、書き言葉では省略しないことも多い。「接続助詞」に用いられる「だ」は、活用形の持つ陳述度が高く、省略ができない。この場合の「だ」が、名詞述語としての性格をもっとも強く持っている。

文末の言い切りの「だ」は、書き言葉では省かない。しかし、話し言葉では、話し言葉の持つ現場性に支えられて、統語的には義務的ではない。その意味で、モダリティ性を持つと言える。しかし、そのモダリティ性にはレベルの差がある。一つは、自分自身に向けた発話、もう一つは、他者に向けた発話の違いである。自分自身に向けて「だ」を用いるときには、「だ」の持つモダリティ性が発動されない状態にあると言える。「言い切り形で自分自身に向けた発話」は、男女ともに用い、「言い切り形で、他者に向けた発話」は、男性だけが用いる。後者に男性だけという条件があるのは、「だ」の持つ強い感情表現性のためである。そこで、女性は、「だ」を省くか、あるいは、「「だ」に対者的働きの強い終助詞を付加」することで、あるいはまた、「のだ」という客観性の高い形式を用いて、「だ」の持つ語気の強さを和らげる。[2]

例文出典　　出典がないものは作例

（金田一）天樹征丸『金田一少年の事件簿１．オペラ座館・新たなる殺人』講談社
（法）植松正「成文法の文章」林大・碧海純一編『法と日本語』有斐閣
（女社長）赤川次郎「女社長に乾杯」『新潮文庫の 100 冊』新潮社
（オペラ）赤川次郎『三毛猫ホームズの歌劇場』角川書店
（鎌倉）西岸良平『鎌倉ものがたり』双葉社
（ちびまるこ）さくらもも子『ちびまる子ちゃん　大野君と杉山君』ホーム社
（ひき逃げ）周防正行「ひき逃げファミリー」『'93 年鑑代表シナリオ集』映人社
（しこ）砂本量・水谷俊之「 シコふんじゃった」『'92 年鑑代表シナリオ集』映人社
（蛇蝎）向田邦子『蛇蝎のごとく』大和書房
（夢見る女）安岡章太郎『質屋の女房』新潮社

2 本稿では「だ」という形式を中心に見てきたが、女性の場合、「一人なの。」のように、連体形「な」を名詞に接続して表現を和らげることも多い。

（朝日）『朝日新聞』2001.3.24

参考文献

上野田鶴子 1972「終助詞とその周辺」『日本語教育』17 号日本語教育学会
小川小百合 1997「現代の若者言葉における文末表現の男女差」『日本教育論文集－小出詞子先生退職記念』凡人社
小泉保 1976「女性の言葉」『言語』5 月号大修館書店
三枝令子 1993「動詞・形容詞の名詞的ふるまい」『ソフトウエア文書のための日本語処理の研究』12 情報処理振興事業協会技術センター
————1997「「って」の体系」『言語文化』34 一橋大学語学研究室
————2000「助動詞「だ」と助詞「か」の結びつきをめぐって」『一橋大学留学生センター紀要』3 号
荘司育子 1992「疑問文の成立に関する一考察　「デス」という形式をめぐって」『日本語日本文化研究』2　大阪外国語大学
鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』むぎ書房
鈴木睦 1993「女性語の本質－－丁寧さ、発話行為の視点から」『日本語学』12 明治書院
泉子・ K・メイナード 2000「日本語表現の情意－「だ」と「じゃない」の場合－」2000 年 3 月 30 日東京女子大学における講演レジメ
手塚知子 1956「並立助詞「の」から「だの」へ－上接する異なる要素の相互干渉による変遷」『国文学言語と文芸』59
仁田義雄 1989「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志『日本語のモダリティ』くろしお出版
野田尚史 1989「真性モダリティを持たない文」仁田義雄・益岡隆志『日本語のモダリティ』くろしお出版
堀井令以知 1974「名詞文の機能」『アカデミア』97
三尾砂 1942『話し言葉の文法』（1995 年くろしお出版）
吉田茂晃 1988「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15　神戸大学文学部国語国文学会
渡辺実 1971『国語構文論』塙書房